お金を使うチンパンジー

ヒトとチンパンジーの知性の共通点は、道具使用についても顕著に認められる。多様な道具を使うのはヒトとチンパンジーだけだ。ゴリラやオランウータンはごく稀にしか道具を使わない。ニホンザルでは道具使用の例は皆無に近い。道具使用は、ヒトとチンパンジーの共通祖先が獲得した一つの知性だといえる。

道具使用に関しては多くの人々がさまざまな定義をしているが、ここでは次のように定義したい。道具とは、ある目的達成のために使用される身体以外の物体である。そして、道具を使用する行動は、社会の中で経験を通じて獲得され、世代をこえて伝播する。

野生の状態でのチンパンジーの道具使用は、ジェーン・グドールによって1960年に初めて報告された。ゴンベ・ストリームという、東アフリカはタンザニアのタンガニーカ湖畔である。チンパンジーは、草の茎を使ってシロアリを釣り上げて食べる。シロアリはチンパンジーの好物だが、素手で捕まえると咬まれてしまう。そのためにチンパンジーは、シロアリを釣り上げる道具として草の茎を用いるのである。

その後、草の茎を使ったシロアリ釣り以外にもチンパンジーのさまざまな道具使用が報告されてきた。西アフリカはギニアのボッソウに住むチンパンジーは、石を使って堅いアブラヤシの種を叩き割る。しかもハンマーと台石だけでなく、その台石を安定させるための支えとなる石までも使用する。(中略)

このように見てくると、他の動物も道具を使っているという人がいるかも知れない。例えば、フィンチ（アトリ科の鳥）の一種は枝を使ってエサとなる虫を引きずり出す。テッポウ魚は水鉄砲のように水を吹き出し、虫を叩き落とす。一見すると、枝が熊手がわりの、そして水が鉄砲がわりの道具として使用されている。しかし、その道具使用は遺伝的に決まっており、地域差は見られない。そのためこれらの行動は本能的行動だといえる。

これに対して、チンパンジーの道具使用には明確な地域差が存在する。シロアリ釣りは東アフリカでは見られるが、西アフリカでは見られない。逆にヤシの実割りは西アフリカでは見られるが、東アフリカでは見られない。どちらにもシロアリや草の茎、ヤシの種や石が存在するにもかかわらず、道具使用には地域差が見られる。ということは、これらの道具使用は個体の経験を通じて獲得される行動なのだ。チンパンジーの道具使用は、その地域社会の中で学習により獲得され世代を超えて伝播する。チンパンジーの使う道具はヒトの使う道具と同様に上述の定義に合致している

鈴木修司・松沢哲郎「お金を使うチンパンジー」『言語』vol.26No.1より